
閉会挨拶

津田 敏隆（京都大学生存圏研究所 所長・教授）

本日は、第7回「京都大学附置研究所・センターシンポジウム 京都からの提言」にこのように多数、朝早くから夕方まで長時間ご参加頂きまことに有難うございました。本シンポジウムを企画致しました、京都大学の14の研究所、および8つの研究センター群を代表致しまして厚くお礼申し上げます。

今回のシンポジウムには神戸大学からのご後援を賜り、同時に多大なご助力を賜りました。特に、学長でいらっしゃいます福田秀樹先生には「バイオリファイナリー」に関する最先端の研究成果をご講演頂きましたこと、心より感謝致しております。一方、読売新聞社からも引き続きご支援して頂きまして、このように盛大にシンポジウムを開催できましたことを喜んでおります。

一年前に「東日本大震災」が起きました。直接の被害に遭われた方々にお悔やみ申しあげるとともに、未だに苦勞しておられる被災者の方々が一日も早く復興されるようお祈りします。未曾有の大地震・津波による自然災害、ならびにそれにとまなう原発事故により、日本はもとより、世界的にもエネルギー政策をはじめ、今後の我々の行く末に不透明感が生じています。さきほどまで行われた、パネルディスカッションでは、まさに「震災後の復興について」という喫緊のテーマについて、関西の3国立大学法人の附置研究所において、指導的立場におられる先生方に貴重な議論を進めて頂きました。

本シンポジウムでは「21世紀の日本を考える」を一貫した基本テーマとしてきておりますが、今回は、特に「明るい社会の未来像」と題しました。震災復興を超えて、持続的に発展可能な未来社会を構築するにあたり、理・工・人文社会の様々な観点での研究成果を講演して頂きました。今日のシンポジウムを通じて、ご出席の皆様が、今後、日本の社会が安定し、着実に成長していく姿を確信して頂けるならば、まことに幸甚に思います。改めまして講師の方々、パネリストの方々、また会議運営にあたられた方々に心よりお礼を申し上げます。

本日のシンポジウムで一端を紹介しましたように、京都大学の研究所・研究センターは、理学・工学、生命科学、ならびに人文社会科学までほぼ総ての学問分野に広がっており、最先端の研究を進め、その過程で学生を教育し、有能な若手人材を社会に送りだしています。この一連のシンポジウムは、10年をかけて、全国の政令指定都市を行脚し、附置研・センターにおける多様な研究教育活動をご紹介して、広く社会に対して研究所・センターの説明責任を果たしていこうという意図がございます。皆様に今後とも京都大学に対して、附置研究所・研究センターをも含めて、ご支援を頂きますよう宜しくお願い申し上げます。以上、簡単ではございますが、お礼かたがた、閉会の挨拶とさせていただきます。本日はどうも有難うございました。（拍手）